※文字の大きさは Meiryo UI ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、（写真 1）（表 1）などと文中に記載し、右ページに（写真 1）（表 1）などと表記の上、貼り付けてください。
※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

※事務局記入欄
No. 206

【様式２】

エントリー学校名：島根県知夫村立知夫小中学校

活動名：学びがつくる三方よし～社会に開かれた総合的な学習の時間～

解決すべき課題：人口 640 人の離島唯一の学校(小中一貫校)とその地域を取り巻く課題

●15 歳で島を出る(＝自立が早い)子どもが多く、**卒業までに、学びに向かう力や人間性を高める必要性が高い**(子どもの課題・保護者の願い)→卒業後島を出た子ども H29 67% H30 70% R1 83%

●校内に閉じ、現実味のない提案で**小学生と中学生との差が分かりにくい発表内容**(学校・教職員の課題)

●地域資源を活かしきれず、総合的な学習の時間の**授業設計に例年苦しむ教職員**(学校・教職員の課題)

●愛を持って子どもを大切にするが、関係性の固定化により**積極的変化が起こりにくい地域性**(地域の課題)

目標・方針：学校の出口＝中学３年生の総合的な学習の時間改革とそこに向かう系統的カリキュラム改革

STEP1：中学３年生の総合的な学習の時間の見直し・改善（H30）

STEP2：中学３年生の総合的な学習の時間の仕組み化・安定運用（H30～）

STEP3：中学３年生に向けた、小中９年間の系統的なカリキュラムの改善・運用（H30～）

活動内容：※活動の流れは、右頁①～⑪参照

STEP1：リアルな地域課題を題材に、当事者の大人(地域・行政)と学びをつくる伴走者(教員・コーディネーター)の大人と共に解決まで実践するチーム PBL(Project Based Learning)を開始

STEP2：チーム PBL の活動の流れ(※)作成・実行(プロジェクト企画～活動終了後の振り返りまで)

STEP3：小中９年間を４期（入門期・前期・中期・後期）に区分けし、カリキュラムを改善・運用

活動の成果：※事例(エンディングノート開発プロジェクト)は、右頁参照

●子どもについた力 ((1)アンケート調査→1 項目あたりの 5 段階評価平均の変化(2)全国学力調査引用)

(1)地域理解力：前 2.6-後 4.4・学習指導要領の力：前 2.3-後 4.3・社会人基礎力：前 2.9-後 4.3

(2)「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか」→とてもそう思う H29 33.3%→R1 66.7%

「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」→とてもそう思う H29 11.1%→R1 50%

●入門～中期-校内発表会・後期(中 2)-子ども議会・(中 3)-成果発表会に人口の 10～15%が来場

●授業によって実現した地域の課題解決数/プロジェクト数 5/5=100% R2 年度 3 プロジェクト実施中

→島の祭りプロデュース(成果:出店数増加・会場やステージデザインを考え、実行)・知夫里定食開発(成果:ホテルのランチメニューに採用)・野菜生産者獲得(成果:給食野菜提供者が倍増)・ふるさと納税返礼品開発(成果:新たな返礼品として「お墓掃除サービス」を開発)・エンディングノート開発(延９冊・12 冊目作成中 ※)

アピールポイント（アイディアや工夫）：離島中山間地域特有の「少人数」を逆手にとった設計・体制

●大人と協働しながら中学生自らが実践し、試行錯誤しながら目標達成(＝地域の課題解決)をすることで、**強烈な成功体験(＝達成感)と深い学びを得、学びに向かう力と人間性が育まれている。**

●それまで担任が一人で抱えていた授業設計・進行を、**学校(教員)・教育委員会(コーディネーター)・地域(課題当事者)の三位一体の体制**で行っている(一人→チーム)。※右図

●授業設計・運営に**いきいきする教員の姿**、異動後に**異動先でも力をいれる教員の姿**。

●手をつけたくてもつけられずにいた**地域課題について、生徒が関わることで解決への動きが起こった。**

「地域課題解決実践での学びがつくる三方よし～だんだん物語(エンディングノート開発)プロジェクト編～」

プロジェクトのはじまり：村役場の福祉課・診療所・福祉施設の福祉関係者で行われる高齢者サポート会議で、高齢者によりよい人生を、と「知夫村版エンディングノート」をつくる話が出ていた。そんな時、教職員が当事者の保健師さんにこの話を聞き、中学３年生のプロジェクトとして、知夫村版エンディングノート(だんだん物語)を一緒につくっていくことになった。

①オリエンテーション by 保健師

真正性：真剣な場→課題の重要性・深刻さを当事者から伝える。

「対象の高齢者の人生に向き合い、その人だけの１冊のアルバムにまとめたエンディングノートをつくります。ぜひ、皆さんの力を貸してほしいです。一緒にやってくれませんか？」

学習を通しての想い・動き・変容
- ●生徒(中学３年生)
- ●伴走者(教育関係者)
- ●当事者(地域・行政)

②チーム結成・目標決め

主体性・モチベーションを高める目標設定

「お渡しした時に、対象者さんが涙を流すものをつくろう！！」

③初訪問

生徒が失敗する前提で見守る。
生徒の様子を見て、課題を明らかにする。

「うまく話が続かない・・・そもそも高齢者と話したことがあまりない・・・」

④福祉施設で話す練習

初訪問時、コミュニケーションの取り方について課題が多かったため、福祉施設に訪問し、練習することを当事者と計画。前回の訪問を振り返り、課題を念頭において、コミュニケーションをとるよう促す。

行く前に、自分が実践している高齢者と話す時のコツをアドバイスする。

⑤再訪問(何度も通う)

生徒に問いかけ「大切な想いは何だろう？」

昔の写真を見ながら、対象者がどんな想いで人生を歩んできたのか、問いかけ対話する。だんだんと、会話が弾むようになってくる。

繰り返す

当事者(地域)×生徒(子ども)×伴走者(教育関係者)

大人の本気と子どもの本気の相乗効果

大人(当事者)の本気の姿を見て子どもが本気に。その姿を見てさらに大人(当事者・伴走者)が本気に。それによって、さらに生徒の主体性が増していく。

⑥編集(人生を 20 ページに納める)

得た情報をまとめ、自分らしく表現する。

「自分らしく表現することができない。」

「”あの人らしさ””自分らしさ”とは・・・？」

⑦中間発表(出資者の福祉課)

担当者より「これ、アルバムと何が違うの？」とダメ出しをもらう。

社会の現実を知り、さらに質をあげる仕掛けを作る。

当事者(地域)×伴走者(教員)

・授業ごとに、当事者と打ち合わせをし、生徒の想いや考えを尊重し、主体性を担保しながら、目標達成に向けてどう関わるかを考えた。(教員)

・目標や自分の役割関わり方を確認し、授業に臨めた。先生の熱意で授業に行きたくなった。(当事者)

⑨振り返り(1)

自分自身も何を学んだかを考える。

制作プロセスでの学びについて振り返ることで、自分の強みや弱みに気づき、さらに成長するために懇談会での大人への質問を準備する。

⑧完成

最終ページは、生徒が自分らしく工夫。家族から対象者へ・対象者から家族へのメッセージを入れる、絵が好きな対象者には似顔絵を入れるなどをして表現した。

⑪振り返り(2)

・活動の満足度→100%
・後輩へのメッセージ
「たくさん失敗すると思うけど、そこで諦めるのではなくて、最後まで全力を出して頑張ってください。そうしたら、達成感が得られると思います。」

⑩成果発表会・贈呈式・懇談会

・ついた力:「高齢者の方と話す力」理由:「高齢者と話すときのマナーを意識しなくてもできるようになり、会話も弾んだから。」
・足りない力:「いろいろな視点で考える力」理由:「自信があったが、ダメ出しをもらって、対象者さんの視点で考えられていないと思ったから。」
・大人へ質問:「どうすれば相手の気持ちを考えられるのか？この活動で身についた力は将来どんな所で役立つのか？」

当事者「エンディングノートとは、その人の人生を深く理解することで、最期をどう遂げたいかという想いに家族が寄り添うことなんだと、私自身が学びました。また、生徒を見ていて、これだったらこれからどんな困難があっても乗り越えていける！と確信しました。」

担任の気づき「総合的な学習の時間で生徒にこんなにも力がつくんだ！と思いました。振り返りシートを書く手が止まらない生徒を見て、この学習での達成感や充実感が伝わってきました。最適な目標を見つけ、そこに向かって大人と共に実践することが価値だと思います。」

高齢者の人生が進路に影響した生徒、卒業して島外に進学した生徒が対象者のところに遊びに行っている姿も見える。